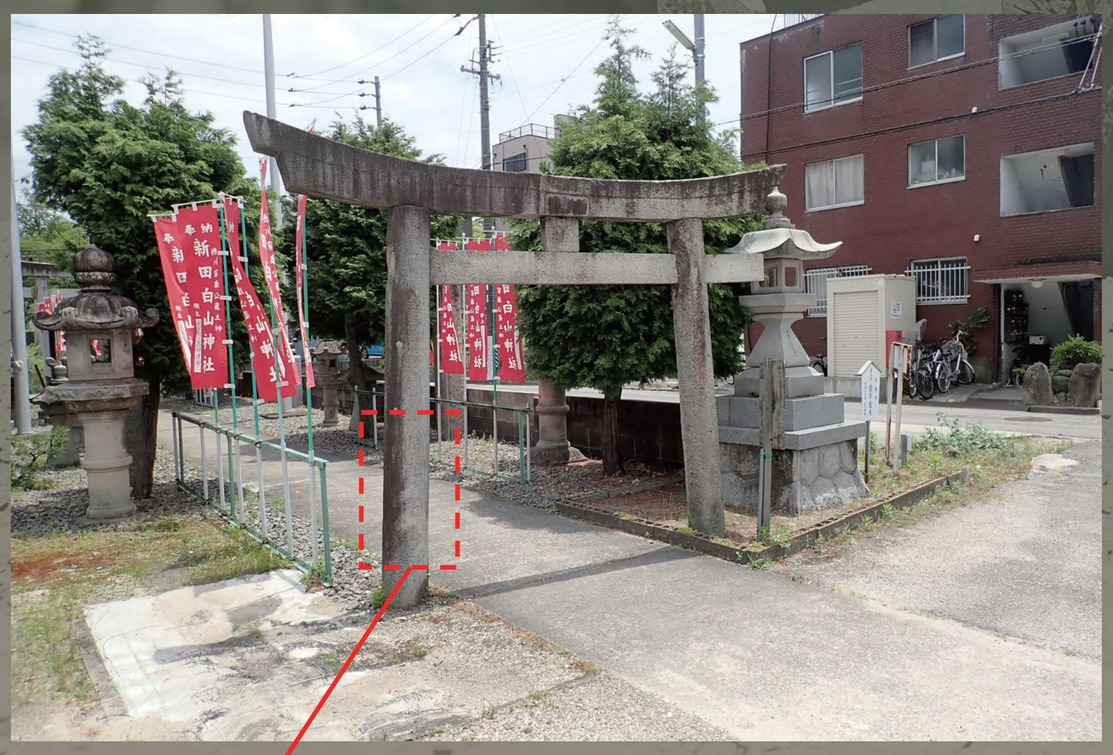
歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 8

石職人のプライド ～石工業の発展と現在～



新田白山神社（康生町）鳥居
岡崎市教育委員会蔵



鳥居の柱下部に銘が残る
「石工　石原　加兵衛」

1688 年から 1704 年にかけては、石工業（いしこうぎょう）において変革がありました。

この時代以降、作品を製作した石工（いしく）の名前が入った、在銘作品（ざいめいさくひん）が見られるようになります。名前を入れる理由としては、自らの仕事に責任を持つためであったり、作品の価値を高めるため、そして石工（いしく）の技術や伝統、歴史を後世に伝えるため、といった理由が考えられます。石工（いしく）が銘を入れることは、単なるサイン以上の意味を持ち、作品の価値を高め、石工（いしく）の技術や伝統、歴史を後世に伝える上で重要な役割を果たしています。

製作された岡崎の石製品（せきせいひん）は発達した矢作川舟運（しゅううん）により、各地に運ばれました。

発展と現在

城下町整備の際に招かれた優れた技術を持った石工（いしく）たちが起源と思われる石工業。

19世紀の初めに少数精鋭の29軒だった石屋は、伝馬町（てんまちょう）周辺に「石屋町（いしやまち）」を形成するなどして、19世紀の終わりには約 50 軒に増え、戦前の1939年には、350 軒を数える程、発展をし、最盛期を迎えていました。1948年には岡崎初の石の組合である岡崎石製品（せきせいひん）工業協同組合が設立されています。

戦後1955年頃には、高度経済成長期に入り機械化が進み、作業効率が従来の手作業と比較して飛躍的に向上するとともに、道路整備の進展や自動車の急速な普及に伴い輸送力が大幅に向上しました。それに伴う販路の拡大により、1967年に上佐々木町（かみささきちょう）、1976 年には稲熊町（いなぐまちょう）にそれぞれ「石工団地（せきこうだんち）」を形成し、それぞれ岡崎石製品（せきせいひん）工業団地協同組合（現岡崎石工団地協同組合）と協同組合岡崎石製品（せきせいひん）工場公園団地を設立しました。

1978年には、3組合により岡崎石製品（せきせいひん）協同組合連合会が設立され、翌年の1979 年 8 月に経済産業大臣から伝統的工芸品の指定を受けています。

現在は、優れた素材と高い技術力により全国的に有名となった岡崎の石工品。職業訓練法人岡崎技術工学院では石材加工技術の訓練が行われ、今なお匠の技が受け継がれています。



籠田公園北側から東に伸びる「石屋町通り」。通りの歩道上には点々と正方形の花崗岩（かこうがん）があしらわれる。



岡崎技術工学院 石材加工科で実際に行われている授業の様子。職業訓練法人岡崎技術工学院 提供

歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

ココに注目！

～石の名産地の証跡～

石製品を製作するための石材は、「石切丁場」と呼ばれる採石場から採取されますが、地形の起伏図から、現在の六供町にも石切丁場（甲山丁場）があったことが分かっており、この丁場は岡崎城に最も近い石材産出地であることから、石製品だけでなく、城下町整備の際に、石垣用の石材が採取されていた可能性が高いと考えられています。



地形起伏図に一部加筆　岡崎市教育委員会蔵

現代における問題

石材が採取されていたその証跡として、甲山丁場跡は現代において急傾斜な崖面となっており、崩壊の恐れを孕んでいました。そうした状況を改善するために、愛知県と岡崎市が連携をし、対策工事が実施されています。（急傾斜地崩壊対策事業）



甲山丁場跡　北側



甲山丁場跡　南側